

南 亮進・牧野文夫編著

『流れゆく大河』

—中国農村労働の移動—

日本評論社 1999.9 xii+207 ページ

中国は改革開放後大きな変化を遂げたが、そのうちの一つがこれまで土地に縛り付けていた農民の移動を結果的に自由にしたことである。もちろん、まださまざまな制約は残されている。しかし、本書のタイトルが示しているように、膨大な数の農村過剰労働力が時にはゆっくりと、時には激しく、流れ始めたことは、少なくとも中国社会・経済の近代化という点から見て大きな意味を持っている。本書は、中国で起きているこうした農村労働の大規模な移動の実態とその効果について、送り出す農村側と受け入れる都市・企業側の両面での実態調査に基づき、鮮明な問題意識の下で、制度的分析と計量的分析を交えながら追究した共同研究の成果である。中国の労働移動にかんしては、中国の国内外で多大な関心を集め、北京で国際シンポジウムさえ開かれたほどで、これまで多くの調査・研究がなされてきた¹⁾。本書第2章でサーベイされているように、我が国においても大島一二氏の著作をはじめ、一外国の農村労働移動問題としては際だって多い研究成果が出されている。しかし、計量的分析を含む総合的な研究となると、後に述べる Knight = Song のそれと並んで、本書は今日最も水準の高いものと断言できる。以下、紙幅の制限もあることから、本書の全体を紹介することを止め、評者から見たいくつかの「発見」と興味ある含意を取り上げて、それについて若干コメントすることにしよう。

第1が、農村労働市場の構造と過剰労働力の推計に関して(第3章)である。ここでは著者たち(羅敏鎮・本台進)はルイス型の2部門モデルを発展させた3部門(農業、郷鎮企業、都市の各部門)モデルを作り、農業並びに郷鎮企業の生産関数を計測している。そこから郷鎮企業の賃金率はその労働の限界生産力にほぼ等しく、それはまた農業の限界労働生産力を大きく上回り、平均生産力に大体等しいという興味深い事実を発見している。したがって、ルイス・モデル的にいえば、伝統部門(生存維持部門)が

農業に対応するのに対して農村内にある郷鎮企業部門は「近代部門」に相当することになる。それでは後に見るように都市部門はどうであろうか。やはり二重構造になっているのではなかろうか。ただし、こうした計測は全国省市自治区レベルのデータを用いたのもであり、もっとミクロ的なデータによる検証が必要なような気がする。

仮に農業における過剰労働力を、限界生産力が賃金率以下の部分と定義すると、そこから容易に過剰労働力の規模を算出することができるが、彼らの計測では通説である2-3割を大きく上回り、農業における過剰労働比率は実に約60%にも達することになる。しかし、これは過剰労働力の定義にも左右され、限界生産力ゼロの労働力と定義すると当然その比率よりも小さくなる。ただし、ヌルクセ的な意味での限界生産力ゼロなる労働力を検出することは容易ではない。

中国の農業における過剰労働力(ないしは比率)の推計はこれまでも試みられてきた。たとえば加藤弘之は、最もよく使われる方法であるが、耕地当たりの必要労働日数を基準にして1984年の農村総労働力に占める過剰労働力の割合を55.4%と推計した²⁾。ただし、そこには郷鎮企業従業員や出稼ぎ労働力も含まれているので、それを過剰労働力から差し引き、農村労働力に占める比率を求めると21%に過剰労働比率は低下する。これが通説にはほぼ対応する数字である。あるいは王誠は農業固定資本額に対する必要労働者数を基準にして過剰労働力を推計し、1994年における農村過剰労働比率を31%と見ているし、王紅玲は生産関数アプローチにより、農業部門と非農業部門が利潤を最大化する労働投入比率を基準にして過剰労働を推計したところ、1994年で農村労働力のうち26%が過剰と推定された³⁾。

第2に、農家の労働移動関数の推計に関して(第4章)である。著者たち(劉徳強・高田誠)は600の農家を対象とした調査データから労働移動関数を推計し、期待所得と出稼ぎ行動の間には正の関係があり、ハリス=トダロ・モデルが中国にも妥当することを示唆している。さらに、農家の土地賦存状況よりも労働者数の方が出稼ぎ行動に関連していること、郷鎮企業など非農業部門があれば出稼ぎ行動は減ること、あるいは私的情報ネットワークが出稼ぎにとって重要であることなど、いくつかの重要な含意をそこから導いている。

似たような分析結果は Knight = Song によっても

得られている⁴⁾。彼らは1992、1993年に河北省邯鄲市で実施したかなり大規模な調査に基づき、次のような2段階に分けた労働移動決定要因分析を行っている。すなわち、個人ベースとしてはイ)生物的特性として性別と年齢、ロ)社会的特性として婚姻状況、健康状態、教育レベル、ハ)人生経験として軍隊経験、地方幹部経験、党員か否か、外地への旅行経験、をそれぞれ独立変数に入れて、移動するかどうかのロジット分析を施したところ、性別、年齢、教育水準、軍隊経験、幹部経験、それに一部の旅行経験がそれぞれ有意に作用していることが分かった。次に家族に移動労働力があるかどうかを同様にロジット分析により調べたところ、以下のような結果を求めている。すなわち、家長が女性であること、家長の年齢が36-40歳ではないこと、家長に軍隊経験があること、幹部ではないこと、党員でもないこと、家族に労働力が多いこと、以上の要因が有意に効いているし、農業収入、事業収入、郷鎮企業からの所得、移転所得が多いことはマイナスに作用している。

その点に関連していえば、Knight = Songは恐らく初めて送金の決定要因やそれによる労働移動の分配面の効果を定量的に分析していることで、本書第5章(高田誠)では「出稼ぎによる農村経済への波及効果」と題して労働移動のもたらす農村経済への効果を専ら定性的に、あるいは事例的に分析しているのに比べて、際だった対照を示している。

第3に、都市における農民工、つまり出稼ぎ労働者と都市労働者との代替補完関係にかんしてである(第7章)。著者(牧野文夫)は農民工と都市労働者との間に代替関係があるか否かを、まずトランスログ生産関数を導出し、次にそれに基づき3種類の代替の弾力性を計測することで調べている。その結果、改革の進んでいる広州市や北京市で、また国有企業よりも非国有企業においてそうした代替関係が進む傾向があり、農民工はより多く、容易く都市フォーマル部門において雇用される事実を確認している。逆に言えば、改革が比較的遅れている武漢市のような地域ではそうした代替関係は希薄である。この種の分析は私の知る限り著者によって初めてなされたものであり、また重要な含意を導いているという点で、本書全体の中でも最も優れた成果といえよう。

ところで、農民工と都市労働者との代替関係が進めば、当然都市労働市場の構造は変化してくることになる。従来、都市労働市場は国有部門と非国有部門との間で「分断化」されていると見なされてきた。

まして、都市戸籍を持たない農民工とそれ以外の都市労働力との間には歴然たる壁があると考えられてきた。確かに、都市における3K労働市場には外来工が多くを占めており、失業したり、レイオフされた国有部門の労働者は気位が高くてそうした市場には入ろうとしない。しかし、いくつかの個別報告が示しているように、国有部門の労働市場に農民工たちは入り始めている。その意味で中国における都市労働市場の構造はいまや大きく変化してきている。他方、本書第6章(李旭)では、賃金格差の分析の結果、広州市では都市労働市場は比較的統一されているが、武漢市と北京市では依然として労働市場の分断化が見られるという。この結論は先に見た第7章のそれとやや平仄が合わず、北京市では果たして労働市場が分断化されているのか、それとも異なる労働間に代替性が高く、労働市場はむしろ統一されていると見るのか、読者を少々混乱させる結論となっている。

中国における都市労働市場構造問題にかんしてはこれからも調査、追究していく必要があるだろう。たとえばKnightらは北京、深圳、武漢、蘇州における118企業、2,900人の出稼ぎ労働者を対象とする調査を行い、彼らの労働生産性が非出稼ぎ工(都市労働者)のその3倍であることを見出している。つまり、中国の都市では安い出稼ぎ工を使いつつも、とくにフォーマル部門では過剰労働力を抱えていることになる⁵⁾。いいかえれば、都市近代部門は決して一元的な構造を持っているわけではない、ともあれ、著者たちによりこの面での調査・研究が今後一層発展していくことを期待して止まない。

注

1) 本書第2章(李旭)では中国国内外の研究については非常に丁寧なサーベイがなされており、とくにこの問題をこれから始めようとする読者にとって大変便利はガイドとなっているが、如何せんほとんどが中国語と日本語の文献であり、取り上げられた英語文献はごくわずかである。しかし、EconLitで検索してみれば分かるとおり、この問題に関連する英語文献は相当な数に上っている。

2) 加藤弘之『中国の経済発展と市場化——改革・開放時代の検証』名古屋大学出版会、1997年、第2章補論参照。

3) 以上2つの推計は、丸川知雄「失業問題の現状と展望」中兼和津次編『現代中国の構造変動第2巻 経済——構造変動と市場化』東京大学出版会、2000年所収に紹介されている。

4) John Knight and Lina Song, *The Rural-Urban*

Divide—Economic Disparities and Interactions in China, Oxford University Press, 1999 Chapter 9 参照.

5) John Knight, Lina Song and Jia Huaibin, "Chinese Rural Migrants in Urban Enterprises: Three Perspectives," *Journal of Development Studies*, Vol. 35, No. 3, pp. 73-104.

[中兼和津次]